

# 漱石山房の秋

芥川龍之介

青空文庫



夜寒よさむの細い往來わうらいを爪先つまさき上あがりに上あがつて行ゆくと、古ぼけた板屋  
 根の門の前へ出る。門には電灯がともつてゐるが、柱に掲げた標  
 札の如きは、殆ど有無ほとんうむさへも判然しない。門をくぐると砂利じやりが敷  
 いてあつて、その又砂利の上には庭樹の落葉が紛々ふんぶんとして乱れ  
 てゐる。

砂利と落葉とを踏んで玄関へ来ると、これも亦古ぼけた格子戸かうしど  
 の外ほかは、壁と云はず壁板したみと云はず、悉く蔦ことごとつたに蔽はれてゐる。だか  
 ら案内を請はうと思つたら、まづその蔦の枯葉をがさつかせて、  
 呼鈴ベルの鈕ボタンを探さねばならぬ。それでもやつと呼鈴ベルを押すと、明り  
 のさしてゐる障子が開いて、束髪そくはつに結ゆつた女中ひとりが一人、すぐに

格子戸の掛け金を外はづしてくる。玄関の東側には廊下があり、その廊下の欄干らんかんの外には、冬を知らない木賊とくさの色が一面に庭を埋めてゐるが、客間の硝子戸ガラスを洩れる電灯の光も、今は其処そこまでは照らしてゐない。いや、その光がさしてゐるだけに、向うの軒のきさ先に吊した風鐸ふうたくの影も、反つて濃くなつた宵闇よひやみの中に隠されてゐる位である。

硝子戸から客間を覗のぞいて見ると、雨漏りの痕と鼠の食つた穴とが、白い紙張りの天井てんじように斑々はんぱんとまだ残つてゐる。が、十畳の座敷には、赤い五羽鶴ごはづるの毯たんが敷いてあるから、畳の古びだけはぶんみやん分ぶん明めいではない。この客間の西側（玄関寄り）には、更紗さらさの唐か紙らかみが二枚あつて、その一枚の上に古色こしよくを帯びた壁懸けが一つ

下つてゐる。麻の地に黄色に百合のやうな花を繡つたのは、津田  
 青楓氏か何かの図案らしい。この唐紙の左右の壁際には、余り  
 上等でない硝子戸の本箱があつて、その何段かの棚の上にはぎつ  
 しり洋書が詰まつてゐる。それから廊下に接した南側には、殺  
 風景な鉄格子の西洋窓の前に大きな紫檀の机を据ゑて、その  
 上に硯や筆立てが、紙絹の類や法帖と一しよに、存外行儀よく  
 並べてある。その窓を刺した南側の壁と向うの北側の壁とには、  
 殆ど軸の挂かつてゐなかつた事がない。蔵沢の墨竹が黄  
 興の「文章千古事」と挨拶をしてゐる事もある。木庵  
 の「花開万国春」が呉昌蹟の木蓮と鉢合せをしてゐ  
 る事もある。が、客間を飾つてゐる書画は独りこれらの軸ばかり

ではない。西側の壁には安井曾太郎やすゐそうたろうの油絵の風景画が、東側の壁には斎藤与里氏さいとうよりの油絵の艸花くさばなが、さうして又北側の壁には明めいげつぜんじの無絃琴むげんきんと云ふ艸書さうしょの横物よこものが、いづれも額がくになつて挂かかつてゐる。その額の下や軸の前に、或は銅瓶どうへいに梅もどきが、或は青磁せいじに菊の花がその時々で投げこんであるのは、無論奥さんの風流に相違あるまい。

もし先客がなかつたなら、この客間を覗いた眼を更に次の間まへ転じなければならぬ。次の間と云つても客間の東側には、唐紙からかみも何もないのだから、実は一つ座敷も同じ事である。唯此処ここは板敷で、中央に拵はういつけんげた方一間あまりの古絨毯ふるじゆうたんの外ほかには、一枚の畳も敷いてはない。さうして東と北の二方にほうの壁には、新古和漢

洋の書物を詰めた、無暗に大きな書棚が並んでゐる。書物はそれ  
 でも詰まり切らないのか、ぢかに下の床ゆかの上へ積んである数かずも少  
 くない。その上やはり南側の窓際に置いた机の上にも、軸はだの法は  
ふてふ帖てふだの画集うづたかもだのが雑然うづたかもと堆うづたかもく盛り上つてゐる。だから中央はに敷  
 いた古絨毯はも、四方に並べてある書物のおかげで、派手はなるべき  
 赤い色わづかが僅わづかばかりしか見えてゐない。しかもそのまん中には小さ  
 い紫檀したんの机があつて、その又机の向うには座蒲団が二枚重ねてあ  
 る。銅印どういんが一つ、石印せきいんが二つ三つみ、ペン皿ぶんちんに代へた竹ちやきの茶箕ちやき、  
 その中の万年筆、それから玉ぎよくの文鎮ぶんちんを置いた一綴りの原稿用紙  
 ——机の上にはこの外ほかに老眼鏡ろうがんきやうが載せてある事も珍めづしくない。  
 その真上まうえには電灯が煌くわうくわう々々と光を放つてゐる。傍かたはらには瀬戸火鉢せとひばち

の鉄瓶が虫の啼くやうに沸たぎつてゐる。もし夜寒よさむが甚しければ、少し離れた瓦斯ガス煖炉だんろにも赤々と火が動いてゐる。さうしてその机うしろの後、二枚重ねた座蒲団の上には、何処どこか獅子ししを想はせる、脊せうの低い半はん白ぱくの老人が、或は手紙の筆を走らせたり、或は唐本たうほんの詩集ししゅうを翻ひるしたりしながら、端然たんぜんと独り坐つてゐる。……

漱石山房そうせきさんぼうの秋の夜よは、かう云ふ蕭條せうでうたるものであつた。



# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介作品集第三卷」昭和出版社

1965（昭和40）年12月20日発行

※底本の「軒光《のきさき》」「殆《ほと》ど」「飜《ひるが》  
したり」はそれぞれ、「軒先《のきさき》」「殆《ほとん》ど」  
「飜《ひるがえ》したり」にあらためました。

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月26日公開

2003年10月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 漱石山房の秋

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>